

木造釈迦如来乃両脇侍像

大講堂の御本尊は、釈迦三尊像として知られている。中央の像は、釈迦牟尼仏である。釈迦牟尼仏は瞑想姿でお座りになって、目は半分お閉じになり、手は教えを示す印相（ムドラ）を結んでおられる。彫像の細長い耳たぶ、頭頂部の肉髻、螺髪は、仏像では慈悲、知恵、および悟りを表すために使用されている図像表現である。釈迦牟尼仏のお座りになっている蓮台の須弥壇は、仏教宇宙論の物理的および形而上学的中心に位置する聖なる山、須弥山を象徴している。

釈迦牟尼仏は、同じように教えの印相を結んでいる菩薩に囲まれている。右側には、精神的な洞察力を備えた文殊菩薩が、左側には、正しい行いの神である普賢菩薩がお並びになっている。各像の後ろの金色の光背から放たれている光の矢は、聖なる力の放射を象徴している。三尊像は、その高い位置から、毎年数回舞楽の奉納が行われる常行堂の舞台を、中庭を横切ってご覧になっている。これら2つの建造物を正確に並べた配置は三つの堂の構成を深く検討して設計された事がわかる。

釈迦三尊像は、986年頃、圓教寺の開祖の性空上人（910-1007）の弟子であった感阿上人によって作られた。それぞれの彫像は、1本の檜から細心の注意を払って彫られ、漆と金箔で仕上げられている。大講堂と三尊像それぞれはすべて国の重要文化財である。